

女優の娘

西四十一

五

黄

星

作



(九) 月二十一日正大

舞臺の上に現はれた衣笠萬里子

は、否やアンチガネに扮した

衣笠萬里子は、殆ど十八九歳の

若さと美しさ、而して老廢の企

及ばざる優秀な技術を有つ

て居た、名匠の手に成つた形刻

像の様な、美事な體態、乙女の

様な、若々しい肉聲、巧な表情、

軽妙な動作、何人がこれ今か

人氣を一人で負つて立つたそ

云ふ経験のある、老女優衣笠萬

里子と思つた者がもう一否

や縱へ有つたとしても、彼等は

唯現實の美と優秀な技術とに魅

せられて丁つて、彼女の過去の

一切を忘れた様に、唯もう語も

なく創る様な喫采を浴びせて居

るばかりだ。

自分も無論其一人であつた。

何の爲に此劇場に來、何の爲に

此劇を見て居るか

かも忘れて、唯誰も自分

を喝采美した

一人であつた。

千に餘る一舌や二千に近い多

數の觀客は、殆ど口が焼つた

かと思ひながら静かにして居

彼女のアンチガネの一挙手一投

足に注意を拂うのであつた。從

て再び幕が開くと同時に、彼女

は彼の妻に対する眞美の聲

は幾つもある。星雲は殆んど

貼り合つてゐた。

の入口には、衣笠萬里子の名札

が貼り合つてゐた。

舞臺裏、舞臺裏から樂屋へと歩

みを進ぶ。斯くて二階の空富の

室の前を行くと、彼女は其の

で漸く歩を停めた。見ると其の

所の室内は、衣笠萬里子の名札

が貼り合つてゐた。

舞臺の上に現はれた衣笠萬里子

は、否やアンチガネに扮した

衣笠萬里子は、殆ど十八九歳の

若さと美しさ、而して老廢の企

及ばざる優秀な技術を有つ

て居た、名匠の手に成つた形刻

像の様な、美事な體態、乙女の

様な、若々しい肉聲、巧な表情、

軽妙な動作、何人がこれ今か

人氣を一人で負つて立つたそ

云ふ経験のある、老女優衣笠萬

里子と思つた者がもう一否

や縱へ有つたとしても、彼等は

唯現實の美と優秀な技術とに魅

せられて丁つて、彼女の過去の

一切を忘れた様に、唯もう語も

なく創る様な喫采を浴びせて居

るばかりだ。

自分も無論其一人であつた。

何の爲に此劇場に來、何の爲に

此劇を見て居るか

かも忘れて、唯誰も自分

を喝采美した

一人であつた。

千に餘る一舌や二千に近い多

數の觀客は、殆ど口が焼つた

かと思ひながら静かにして居

彼女のアンチガネの一挙手一投

足に注意を拂うのであつた。從

て再び幕が開くと同時に、彼女

は彼の妻に対する眞美の聲

は幾つもある。星雲は殆んど

貼り合つてゐた。

舞臺裏、舞臺裏から樂屋へと歩

みを進ぶ。斯くて二階の空富の

室の前を行くと、彼女は其の

で漸く歩を停めた。見ると其の

所の室内は、衣笠萬里子の名札

が貼り合つてゐた。

舞臺の上に現はれた衣笠萬里子

は、否やアンチガネに扮した

衣笠萬里子は、殆ど十八九歳の

若さと美しさ、而して老廢の企

及ばざる優秀な技術を有つ

て居た、名匠の手に成つた形刻

像の様な、美事な體態、乙女の

様な、若々しい肉聲、巧な表情、

軽妙な動作、何人がこれ今か

人氣を一人で負つて立つたそ

云ふ経験のある、老女優衣笠萬

里子と思つた者がもう一否

や縱へ有つたとしても、彼等は

唯現實の美と優秀な技術とに魅

せられて丁つて、彼女の過去の

一切を忘れた様に、唯もう語も

なく創る様な喫采を浴びせて居

るばかりだ。

自分も無論其一人であつた。

何の爲に此劇場に來、何の爲に

此劇を見て居るか

かも忘れて、唯誰も自分

を喝采美した

一人であつた。

千に餘る一舌や二千に近い多

數の觀客は、殆ど口が焼つた

かと思ひながら静かにして居

彼女のアンチガネの一挙手一投

足に注意を拂うのであつた。從

て再び幕が開くと同時に、彼女

は彼の妻に対する眞美の聲

は幾つもある。星雲は殆んど

貼り合つてゐた。

舞臺裏、舞臺裏から樂屋へと歩

みを進ぶ。斯くて二階の空富の

室の前を行くと、彼女は其の

で漸く歩を停めた。見ると其の

所の室内は、衣笠萬里子の名札

が貼り合つてゐた。

舞臺の上に現はれた衣笠萬里子

は、否やアンチガネに扮した

衣笠萬里子は、殆ど十八九歳の

若さと美しさ、而して老廢の企

及ばざる優秀な技術を有つ

て居た、名匠の手に成つた形刻

像の様な、美事な體態、乙女の

様な、若々しい肉聲、巧な表情、

軽妙な動作、何人がこれ今か

人氣を一人で負つて立つたそ

云ふ経験のある、老女優衣笠萬

里子と思つた者がもう一否

や縱へ有つたとしても、彼等は

唯現實の美と優秀な技術とに魅

せられて丁つて、彼女の過去の

一切を忘れた様に、唯もう語も

なく創る様な喫采を浴びせて居

るばかりだ。

自分も無論其一人であつた。

何の爲に此劇場に來、何の爲に

此劇を見て居るか

かも忘れて、唯誰も自分

を喝采美した

一人であつた。

千に餘る一舌や二千に近い多

數の觀客は、殆ど口が焼つた

かと思ひながら静かにして居

彼女のアンチガネの一挙手一投

足に注意を拂うのであつた。從

て再び幕が開くと同時に、彼女

は彼の妻に対する眞美の聲

は幾つもある。星雲は殆んど

貼り合つてゐた。

舞臺裏、舞臺裏から樂屋へと歩

みを進ぶ。斯くて二階の空富の

室の前を行くと、彼女は其の

で漸く歩を停めた。見ると其の

所の室内は、衣笠萬里子の名札

が貼り合つてゐた。

舞臺の上に現はれた衣笠萬里子

は、否やアンチガネに扮した

衣笠萬里子は、殆ど十八九歳の

若さと美しさ、而して老廢の企

及ばざる優秀な技術を有つ

て居た、名匠の手に成つた形刻

像の様な、美事な體態、乙女の

様な、若々しい肉聲、巧な表情、

軽妙な動作、何人がこれ今か

人氣を一人で負つて立つたそ

云ふ経験のある、老女優衣笠萬

里子と思つた者がもう一否

や縱へ有つたとしても、彼等は

唯現實の美と優秀な技術とに魅

せられて丁つて、彼女の過去の

一切を忘れた様に、唯もう語も

なく創る様な喫采を浴びせて居

るばかりだ。

自分も無論其一人であつた。

何の爲に此劇場に來、何の爲に

此劇を見て居るか

かも忘れて、唯誰も自分